

少年よ、自分を抱け！

「生き直したいなら来い」

ある少年院に講演で呼ばれた。七十人を前にして、最初は一方向的にしゃべってたけど、もっと意味のある時間にしようと思って、「聞きたいことある？」と質疑応答に切り替えた。率直な問いかけが、いくつも出た。

「社会に馴染めないのて出院した後が不安です。どうしたらいいでしょう？」

「何をするにも、まず辛抱。おそらく辛抱できへんかったから、ここにおるんやろ？ 最初から自分の希望することなんかできへんから、何でもいから仕事をやり続けて、自分の履歴書にちゃんとやったと書けるようにすることや」

そうして少しでもお金を貯めたら、技能を身につける学校に通ったりしながら、本当に自分のやりたいことに近づくこともできる。「最初は単純労働、肉体労働しかないかも分からん。でも、そこから這い上がっていく以外にない」と答えた。

別の質問。「社会に出たら、何をいちばん大事にしなければいけないのですか？」

「俺は、時間やと思うてる。金は失くしても何度でも稼げる。友達はいなくなっても、またつくればええ。でも十九歳の時間を二十歳になって取り戻すことはできんのか」

時間を守ることで他人に信頼もされる、限られた時間を大事に使って何かを達成する、明日なんてあるかどうか分からないんやから今日を必死で生きる、そういう時間に対する意識は彼らにはなかったと思う。

でも、「時間がいちばん」は俺の考え。少年院に入るような人間にとって、いちばん大事にすべきことは、まず自分。自分を大事にするということは、自分との約束を守ることと言い換えてもええ。それができれば他人にも優しくできる。自分と「二度とあんなことはしない」と約束したことを守らないから、そういう人間は信用されず、みんな離れていく。自分と約束できるのは自分しかおらんねん。「自分は自分」そう言えるくらいしっかりとした自分をつくらなアカン。そんな強い自分があれば、他人を傷つけるようなことはせえへん。

つまり、自分を大事にすることも、時間を大事にすることも、自己コントロールができるかどうかの時間。当たり前のことやけど、そこが分かれ目。

そして、時間と同じように、本当は平等に与えられてるのが、友達。友をつくれ、ということも彼らへのメッセージとして話してきた。金は人を救わないけれど、友達は救ってくれるというのが、俺の経験。自分の不遇を他人のせいにして、それに耐え切れなかった弱さから事件を起こしたり、いつまでもそういう自分を引きずったり、そんなことは意味がない。友と時間、本当は誰でもこれに恵まれてるんやということに気が付いて新しいスタートをきったほうがええ。

こういう質問もあった。「事業家として成功されていたときもあったそうですが、成功する秘訣は何ですか？」

「だまさないこと。自分も他人も」

言いたいことは、自分を信じて、他人も信じること。成功するかどうかは、それに尽きる。

「その次に大事なことは？」と尋ねるから、「やってから来い」と、答えた。「分かりました。行きます」と十九歳の少年は言った。「やり直したいと思って来たらアカンで。生き直したいなら来いや」とエールを送った。

同じことをやり直そうとしたら、また同じように自分を卑下したり、過去の経験に囚われてしまう。失敗の経験を活かして新しく生き直そうと思うしか、自分を変える方法はない。マイナスからのスタートでええ。たいがいの人の人生は、マイナスからのスタートばかりや。

生き直しは、活かし（生かし）直し。だから「一日一生」。毎日が生き直し。

彼らは俺にとっては「来た道」、彼らにとって俺は「行く道」、だから言えるし、だから耳を傾ける。

情熱に見返りはない

俺の十九歳のころはというと、度胸とハッタリの真っ只中。職場の寿司屋で成人式をしてもろた。キャリアがあると思わせて入った店やったから、歳をごまかしている分、早く成人式がきてしもた。「シャリ炊き三年」のところを三ヶ月で通過してきたし、魚を下ろすのもスーパーで毎日毎日やって三か月で完璧に身に付けた。早く一人前になって稼ぐために、他人が四、五年かかるところを半年で終わらせてきたから、経験した仕事量では負けへんかった。

でも、職人になりたいわけじゃない。目指してたのは一国一城の主。寿司屋は独立してなんぼ。でも、自分の店を持つうにも一介の職人では資金が貯まるはずがないと分かって板前の世界から離れた。

俺の商売の知恵のルーツは、小学生四年生の新聞配達。まともにメシを食わせてもらえへんから始めたアルバイトなのに、二千百円の給料すらも千円は継

母に搾取されるという悔しさ。それでも自分で腹いっぱいお好み焼きを食うためにいろんな悪知恵を働かせた。販売店を通さない「新規営業」を獲得するのは得意やった。

そんな自分を思い起こすと、「ああ、あの時代に玄さんみたいな人がおって相談できたら、俺も違った人生を送ってたかもしれへんなあ」と考えたりもするけれど、でも、そのおかげで他人の三倍くらいの濃密な人生を送ってこれたわけやから、この若者たちにはそんな俺の話が活かされれば、それでええ。魂に年齢は関係ないから。

だから、最後に言った。「もし、ここを出て困ったことがあったら、駆け込み寺へ来い。みんな面倒見てやる。その代わりに、真剣勝負やで。生き直しする覚悟で来いや」

彼らは、俺がそうだったように、ずっと大人の理屈でがんじがらめにされてきたはずなんや。「片親やから」「貧しいから」「愛情を注がれてこなかったから」……。自分たちもそう信じて、またそこに逃げ込む口実にも使ってきたと思う。

そんなことは何も問題にはならへん。面と向かって大人が教えてこなかっただけのことや。もし出生や家庭環境が人生にそんなに影響するなら、俺なんかどこかの組長になってるしかないやんか。

政治を見ても、社会の出来事を見ても、子どもたちの見本になるような責任のある生き様をしてる大人が少ないやろ？ 自信を持ってはっきり言い切れる大人がおらんやろ？ 親や先生や親方や上司、社会全体が若者に知らん顔をしていなかった時代と、いい大人が他人との接触を避けて我が身を守り、情報があふれるネット社会に大人も子どもも閉じこもる今とでは、人は変わってしまう。少年院の様相も世間を反映する。かつては単純暴力が多かった犯罪も、今では性犯罪やオレオレ詐欺、外国人の少年犯罪などが増えてるらしい。

せやけど、そういう人をまともな人間として扱って救っていくのは情熱しかないことは、昔から変わってへんねん。情熱には責任感はあるけれど見返りが無い。そういう大人を求めていることも、彼らの感想文を読むと行間から分かる。裏の世界を生きていたのに今は人助け？ 出てきたら俺のところへ来い？ 面倒見てやる？ 真剣勝負？ そんな直球を投げってくる大人と出会ったことがなかったと言う。自分と同じ中卒なのに世の中を自信を持って生きてる大人がいることに驚いてる。自分の未来にも希望があるかもしれないと思い始めてる。

誰にだって古傷はある。カサブタで忘れたつもりになって偉そうに言うてる人間にも、古傷はある。「古傷は古傷として持っておけ。何かあったら、自分から塩をすり込んで、その痛みを忘れるな」とまで彼らに言ったのは、彼らこそが次の人助けをする人間に生まれ変わっていく可能性があるからや。カサブタ人間には無理。だから、のちのち振り返ることのできる「十九歳の痛み」をち

やんと覚えておいてほしいと思った。

世の中は減点法で人を見る。一流企業に入ることを「百点」として、そこから減点していく。中卒はマイナス〇点、少年院上がりはマイナス〇点、と。しかも、社会にとって都合のええ人間かどうか、社会のルールを守ってきたかどうか、そういうスタンスでの判定しかない。どっちにしても他人の評価。そんなものを自分の点数だと信じるほうがおかしい。「結果は出なかった、けれどここまでやった」と加点法の自己評価がええ。

アメリカは、失敗しても何度でもチャレンジできるチャンスがあると言われるのも、「サクセス・ストーリー」という言葉があるのも、加点法で積み上げていける社会だから。財を成して社会活動をすることも加点法の国では評価される。日本人が財を蓄えるのは、人への猜疑心、社会への不安、自分への自信のなさ、があるからとちがう？ だけど、明日生きてる保証はどこにもない。「一日一生」を生きるしかない。

少年院の子どもらにも再チャレンジできる土壌をつくらなアカン。それで「第二の玄さん」が七十人も出てきたら、それこそ最高や。